

翻訳（羅和对訳）

「人間は何かを知りうるか」(1)

— ガンのヘンリクス 『定期討論のスンマ』 a.1, q.1 —

“*utrum contingat hominem aliquid scire*”

Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa), a.1, q.1:

A Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes

加藤雅人
KATO Masato

This is a Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes of Henry of Ghent's *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.1. Henry's Latin text used here is from *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. I have received written permission to use it from the editor Prof. Gordon A. Wilson with the following words, “The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press.” I am much obliged to Prof. Wilson and those others concerned.

Henry of Ghent (Henricus de Gandavo/Gandavensis; d. 1293) is a thinker active and most influential at Paris University during the last quarter of the 13th century between the age of Thomas Aquinas (d. 1274) and Duns Scotus (d. 1308). The first question (q.1), *utrum contingat hominem aliquid scire*, in the first article (a.1) on the possibility of human knowledge (*de possibilitate sciendi*) in Henry's *Summa*, considers whether it is possible for a human being to know something. This question is very important in the history of Western philosophy because it represents the moment when a medieval scholar took up a question raised by the ancient sceptics and attempted to defend the possibility of human knowledge. This occurred much earlier than Descartes who in the 17th century claimed to establish a solid basis of certain human knowledge against scepticism by means of what is called “*cogito, ergo sum*”.

Key words

- ① medieval philosophy ② Henry of Ghent ③ Summa ④ knowledge ⑤ scepticism
①中世哲学 ②ガンのヘンリクス ③スンマ ④知識 ⑤懐疑主義

はじめに

ここに翻訳するのは、13世紀の思想家ガンのヘンリクスの『定期討論のスンマ』第1項第1問である。翻訳のテキストとして、批判校訂版『ガンのヘンリクス全集』第21巻所収の *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art. 1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28 を用いる¹⁾。

この第1問「人間は何かを知りうるか」(Utrum contingat hominem aliquid scire)は、「知ることの可能性について」(De possibilitate sciendi)を主題とする第1項の冒頭に位置づけられている。この問題は、歴史的にどのような意味をもつのか？

5世紀にアウグスティヌス (Augustinus, d.430)がアカデメイア派の懐疑論に反駁して以後、17世紀にデカルト (Descartes, d.1650)が「我思う、ゆえに我あり」(cogito, ergo sum)という確実性の根拠を提示するまで、1000年有余の間、中世哲学において、この問題がどのように扱われていたかは、必ずしも明らかにされていない²⁾。

じつは、懐疑論を意識しつつ知識の可能性や確実性を吟味することから論説を組み立てるという方法は、デカルトに始まったわけではない。ヘンリクスの『定期討論のスンマ』冒頭の知識論は、アリストテレス、アウグスティヌス、キケロなどを通じて伝えられたさまざまな懐疑的議論を取り上げつつ、デカルトに先立って、中世哲学においてはじめて、知識の可能性や確実性の吟味を考察の出発点としたスンマとして、記念されるべきなのである³⁾。

ヘンリクスの略歴と著作

ガンのヘンリクス (Henricus de Gandavo/ Gandavensis, d.1293)は、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, d.1274)と、ドゥンス・スコトゥス (Duns Scotus, d.1308)の中間の時代 (13世紀第4四半期)を代表する思想家である。この時代は、さまざまな哲学的・神学的論争が集中した時代として特徴づけられる。ヘンリクスの名前は、かつてはスコトゥスの著作を通じて間接的にしか知られていなかったが、彼の著作の批判的全集版の刊行とともに1980年代以降、加速度的に研究者たちの関心を集めるようになった⁴⁾。

ヘンリクスは1240年以前 (1217年とも1223年とも言われるが確かな証拠はない)にガンダヴォ (Gandavo: 現在のベルギーの都市ヘント Gent。仏語名ガン Gand、英独語名гент Ghent)に生まれた。彼の家は、以前考えられていたようなフラマンの貴族ゲータル (Goethals)の家系ではなかった。彼はトゥルネ (Tournai)の司教座聖堂付属学校で幼少期の教育を受け、1265年にはパリ大学学芸学部で学んでいた。そして、1267年に始めて文献に、学芸教師「マギステル」(magister)の呼称で登場する。その後、彼は引き続きパリ大学神学部で学び、1276年から1292

「人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.1— (加藤)

年まで教授を務め、1293年6月23日、トゥルネで亡くなった。またその間、1277年までにはブルッヘの助祭長を、1279年からはトゥルネの助祭長を務めた⁵⁾。この頃までには、ヘンリクスは「厳粛博士」(Doctor Solemnis)として西欧中にその名が知られ、中世後期において広範な影響力をもつ人物となっていた⁶⁾。

ヘンリクスの主著は、『任意討論集』(Quodlibeta)と『定期討論のスンマ』である。『任意討論集』は、毎年二回(Lent & Advent)行われる公開討論に、彼が教授として1276年から1292年にかけてほぼ毎年参加した記録である。任意討論では、任意の教授や学生が、任意の主題(哲学、神学、教会の教え、何であれ)について問題提起することができる。この習慣から、これらの問題は「任意問題」と名づけられる。その問題に教授が解答を与え、その討論を記録すると、「任意討論」(disputatio quodlibetalis)と呼ばれ、学生によって記録されたものが「報告」(reportatio)と呼ばれる。ヘンリクスの『任意討論集』を、グループマンは「真にスコラ主義のもっとも価値ある任意著作」と呼んだ⁷⁾。

他方、ここに翻訳する『定期討論のスンマ』は、「定期問題」(quaestiones ordinariae)と呼ばれる、彼が大学で教授として定期的・体系的に行った討論の記録である。任意討論とは違って、この定期的討論では、教授であるヘンリクス自身が問題を設定し、異論や反対異論を取捨選択し、1つの問題を細かく区分したり、複数の問題を1つの項にまとめることができる⁸⁾。ヘンリクスの『スンマ』は、彼の死後ルネサンス人文主義者Badiusによって1520年に最初に印刷され⁹⁾、1646年にScarpariusの版¹⁰⁾がそれに続いた。その後、『ガンのヘンリクス全集』において、批判校訂版の編集・刊行が現在進行中である¹¹⁾。

批判校訂版『ガンのヘンリクス全集』への道¹²⁾

そもそも、ヘンリクスは在俗の(つまり、修道会に属さない)教授であったために、彼の教説や著作を積極的に支持し保存する会派をもたなかった。ところが、16～17世紀、偶然の出来事によって、上述のルネサンス版が編集・出版されたおかげで、彼の著作はかろうじて消失を免れた¹³⁾。とはいえ、それ以後20世紀まで、テキストの批判校訂版の編集作業はまったく進まなかった。1885年、エーレが、『定期討論のスンマ』と『任意討論集』の新版の編集と刊行の開始を予告した¹⁴⁾が、10年後の1894年、ド・ウルフはその計画の不履行を嘆いている¹⁵⁾。

その後その計画は、レーヴェン大学哲学高等研究所に引き継がれた。その研究所では、ド・ウルフとマンションが中心となって、古代・中世のキリスト教思想家の研究と出版活動が行われていた(現在のDe Wulf-Mansion Centre)。そして1901年、ド・ウルフは、「ベルギーの哲学者たち」Les Philosophes Belgesという新シリーズの第1作において、ヘンリクスの著作の編集作業の開始を予告した¹⁶⁾が、この計画も半世紀以上実行に移されず、1958年、レーヴェンで開催された第1回国際中世哲学学会において、「出席者たちの中から、ヘンリクスの著作の批判校

訂版を待望する声があがった」とフェルベケ教授は報告している¹⁷⁾。

その10年後の1968年から、De Wulf-Mansion Centreのマッケンが、ヨーロッパの国々をまわって236の写本を収集し、マイクロフィルムに収めた。ついに1978年、レーヴェン大学出版局はDe Wulf-Mansion Centreの古代・中世哲学新シリーズとして『ガンのヘンリクス全集』の出版を決定し、マッケンを編集委員長として、翌1979年より刊行を開始した。『全集』第1巻・第2巻には、マッケンの集めた写本の目録と綿密な解説が収められている¹⁸⁾。

『定期討論のスンマ』冒頭の知識論の構造

ヘンリクスは『定期討論のスンマ』冒頭の5つの項において、知識の構造について体系的な説明を行なっている。彼は「知識と知られうるもの一般」(*scientia et scibile communiter et in generali*)についての考察において、「人間の認識の可能性」(*possibilitas humanae cognitionis*)に関連して次の5項目を挙げている。(1)「知ることの可能性」(*possibilitas sciendi*)、(2)「知るものの様態」(*modus sciendi*)、(3)「知られうるものの性質」(*qualitas scibilium*)、(4)「知りたという欲求」(*appetitus sciendi*)、(5)「知ろうとする探求心」(*studium sciendi*)。

このうち、(1)「知ることの可能性」について、さらに12の問題が細区分され、その最初の問が、ここに翻訳する「人間は何かを知りうるか」(*utrum contingat hominem aliquid scire*)である。『定期討論のスンマ』は、はじめて「知の可能性」という懐疑主義を意識した問題の考察から出発するスンマであると、本稿「はじめに」で述べた。しかし、もちろんそれは「神学」のスンマであって、その構成は、神学の本性(第1項-第20項)、神の本性と属性(第21項-第52項)、そして三位一体(第53項-第75項)となっている。ヘンリクスは、「被造物について」の問題を扱う意図を持っていたかもしれないが、現存する形では「神について」の75項しか残っていない。ヘンリクスの『定期討論のスンマ』全体は、トマスの『神学大全(スンマ)』第I部の第1問-第43問と、ほぼ対応している¹⁹⁾。

ところで、ヘンリクス『定期討論のスンマ』冒頭の知識論はいかなる意味をもつのか。彼にとって神学の重要な問題は、いかなる仕方で神学は「学知」(*scientia*)であると言えるのかを示すことであった。そのために、I. 神学の「学知」性、II. 神学の「語り」(*locutio*)、III. 神学の「知の内容」(*quae et qualia*)という三つの問題を彼は設定したのである。そして、こうした「専門的に神学に固有な知識と知られうるもの」(*scientia et scibile propriis theologiae in speciali*)の考察に先だって、「知識と知られうるもの一般」についての考察、そして人間にとつての「知識の可能性」の考察から始めたのである。

要するに、『定期討論のスンマ』冒頭の知識論はたんなる前置きではなく、学知としての神学の方法論であった。これから論じようとする神学はどのような意味において学知と言われ、また学知としての神学を人はどのような仕方で研究することができるかということを、彼は探求

に先立って根拠づけようとしたのである。

第1項第1問「人間は何かを知りうるか」の論点

第1問において、ヘンリクスは、「人間は何も知りえない」という7つの〈異論〉と、「人間は何かを知りうる」という6つの〈反対異論〉を提示した後、自らの〈解答〉を示す。〈解答〉では、彼はまず、人間にとって最も一般的な知の考察から始める。すなわち、「あらゆる誤謬や欺きを免れ」(absque omni fallacia et deceptione)、あるがままのものを認識するための」(qua cognoscitur res sicut est)、「あらゆる確実な知の意味で広く受け取られる場合の知ること」(scire large accepto ad omnem notitiam certam)である。この意味においては、「人間が何かを知りうること」は、「明らかであり明晰である」(manifestum est et clarum)と断言する。

このような(A)「広い意味での知」について、ヘンリクスは2つの場合を区別する。1つは、(A1)「他者の外からの証言によって」(testimonio alieno et exteriori)知る場合、もう1つは、(A2)「自身の内からの証言によって」(testimonio proprio et interiori)知る場合である。(A1)「他者の証言によって」知る場合について、ヘンリクスはアウグスティヌス『三位一体論』を典拠として、「大海」(oceanus)、有名な「土地や都市」(terrae atque urbes)、歴史的な「人物や彼らの行為」(homines et opera eorum)、「自分の居場所や出自」(in quibus locis vel ex quibus hominibus fuerimus exorti)などを例示する。

(A2)「内からの証言によって」知るのは、「我々が自分の内や自分の周りに経験する諸々のこと」(ea quae experimur in nobis et circa nos)であり、それは(A2-1)感覚的認識(cognitio sensitiva)の場合と、(A2-2)知的認識(cognitio intellectiva)の場合に区分される。(A2-1)について、ヘンリクスはアリストテレス、キケロ、アウグスティヌスを引用する。(A2-2)について、ヘンリクスは、アウグスティヌスを典拠として、「私が生きていることを私は知っている」('scio me vivere')という知の不可謬性を主張するために、「欺かれる人が生きていることは確実だから」(quoniam certum est eum qui fallitur vivere)を理由とする。

つぎに、ヘンリクスは、アリストテレスやキケロを典拠として、古代懐疑主義の7つの懐疑論を示し、〈解答〉と〈異論解答〉において、それらを論駁する。〈解答〉において、ヘンリクスは、キケロを典拠として、知識の全否定から生じる現実的諸問題を示すことによって反駁する。第1に、知の全否定によって、技術知の所有者と非所有者の区別が崩壊する。第2に、知の全否定によって、あまねく賞賛されている英雄的行為や忠誠が理解不可能となる。第3に、知の全否定によって、我々の通常の危険回避の行動が説明不可能となる。〈異論解答〉において、ヘンリクスは、アリストテレス、キケロ、アウグスティヌスを典拠として、7つの異論の各々に反駁する。

注

- 1) 著作権使用について快く承諾して頂いた編者 Gordon Wilson 教授、De Wulf-Mansion センター、および Leuven 大学出版局に対して感謝する。翻訳にあたって、以下の英訳を参照した。*Henry of Ghent's Summa of Ordinary Questions Article One: On the Possibility of Knowing*, tr. by Roland J. Teske, S. J., St. Augustine's Press: South Bend, Indiana, 2008; "Henry of Ghent Can a Human Being Know Anything?", tr. by R. Pasnau, in *Cambridge Translations of Medieval Philosophical Texts. Volume III: Mind and Knowledge*, Cambridge U. P., 2002, pp.93-108.
- 2) 近世以降の懐疑主義再発見に重要な役割を果たした古代懐疑主義の古典、セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』(金山弥平・金山万里子訳、京都大学学術出版会、1998年)は、ジルソンによれば、12世紀末にすでにラテン語に翻訳されていたが16世紀まで公刊されなかった。したがって、その書に集められた様々な懐疑的議論を中世哲学者が知っていたという証拠はない。しかし、それは中世の人々の懐疑論についての無知を意味するわけではない。アウグスティヌス『アカデメイア派駁論』が、中世の読者に様々な懐疑的議論を伝えた。ヘンリクスは、その最も熱心な読者であった。cf. Étienne Gilson, *History of Christian Philosophy in the Middle Ages*, N.Y., 1955, p.759, n.36. 加藤雅人『ガンのヘンリクスの哲学』創文社、1998年、pp.63-4.
- 3) ジルソンによれば、それは初めて中世の神学者が神学的な理由からアカデメイア派の懐疑主義をとり上げた瞬間を記念する。cf. Ibid.
- 4) cf. Pasquale Porro, "Bibliography", in W.Vanhamel (ed.), *Henry of Ghent: Proceedings of the International Colloquium on the Occasion of the 700th Anniversary of His Death (1293)*, Leuven U.P., Louvain, 1996, pp.405-434; 加藤雅人、前掲書、1998年、pp.4-6; P.Porro, "Bibliography on Henry of Ghent (1994-2002)", in G.Guldentops & C.Steel (eds.), *Henry of Ghent and the Transformation of Scholastic Thought: Studies in Memory of Jos Decorte*, Leuven U. P., Louvain, 2003, pp.409-426. ついに2011年、BrillのCompanionsシリーズとして、『ヘンリクス必携』が出版されるに到った。cf. Gordon A.Wilson (ed.), *A Companion to Henry of Ghent*, Brill: Leiden/Boston, 2011.
- 5) cf. P.Porro, "An Historiographical Image of Henry of Ghent", in W.Vanhamel (ed.), 1996, pp.373-403; S.P.Marrone, *Truth and Scientific Knowledge in the Thought of Henry of Ghent*, Cambridge Massachusetts, 1985, pp.1-11.
- 6) cf. W.Vanhamel, "Preface", in W.Vanhamel (ed.), *Henry of Ghent: Proceedings ...*, 1996, p.vii; G.G. & C.S., "Preface", in G.Guldentops & C.Steel (eds.), *Henry of Ghent and the Transformation ...*, 2003, p.x.
- 7) Martin Grabmann, "Bernhard von Auvergne, O.P. († nach 1304), ein Interpret und Verteidiger des hl. Thomas von Aquin aus alter Zeit", *Divus Thomas* (Fr.), 10, 1932, p.34: "wohl das wertvollste Quodlibetalienwerk des Scholastik". cf. Gordon A.Wilson, "Henry of Ghent's Written Legacy", in Gordon A.Wilson (ed.), *A Companion to ...*, 2011, pp.3-23 (p.13, n.53).
- 8) cf. Gordon A.Wilson, "Henry of Ghent's Written ...", 2011, pp.13-14
- 9) *Summae Quaestionum Ordinariarum theologi recepto praeconio Solemnis Henrici A Gandavo*, cum duplici repertorio, *Tomos Prior; Posterior*. Venunda [n] tur in aedibus IODOCI BADI ASCENSII, cum Priuilegio Regio ad calcem explicando. Paris, in fo, 2 vols., 1520. cf. *Summa [e] Quaestionum Ordinariarum* (repr. of the 1520 edition), 2 vols., The Franciscan Institute, St. Bonaventure, N.Y., 1953.

- 10) *Magistri Henrici Goethals a Gandavo, ordinis Servorum B.M.V., Doctor Solemnis, socii Sorbonici, Archidiaconi Tornacensis, Summa in tres partes digesta*, …, opera et studio A.R.P.M. Hieronymi Scarparii …, Ferrariae, apud Franciscum Succium, 1646.
- 11) 現在までに以下の巻が刊行されている。Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, vol.21, *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson, 2005; vol. 27, art.31-34, ed. Raymond Macken, 1991; vol. 28, art.35-40, ed. Gordon A. Wilson, 1994; vol. 29, art. 41-46, ed. Ludwig Hödl, 1998; vol. 30, art. 47-52, ed. Markus Führer, 1998.
- 12) cf. Raymond Macken, “Der Aufbau eines wissenschaftlichen Unternehmens: die *Opera Omnia* des Heinrich von Gent”, *Franziskanische Studien* 65, 1983, SS.82-96; W. Vanhamel, “Preface”, 1996, p.viii; 加藤雅人、前掲書、1998年、pp.7-11。
- 13) cf. Gilson, *History of Christian Philosophy* …, 1955, p.409; P. Porro, “An Historiographical Image …”, 1996, pp.373-375.
- 14) cf. Franz Ehrle, “Beiträge zu den Biographien berühmter Scholastiker I: Heinrich von Gent”, *Archiv für Literatur und Kirchen Geschichte des Mettelalters I*, 1885, pp.365-401 & pp.507-8.
- 15) cf. Maurice De Wulf, *Études sur Henri de Gand*, Louvain: Paris, 1894, p.20.
- 16) cf. Maurice De Wulf, *Le Traité “De Unitate Formae” de Gilles de Lessines. Text inédit et Étude*, Les Philosophes Belges, I, Louvain, 1901, p.iv.
- 17) Gérard Verbeke, “Les éditions critique de textes médiévaux”, *L’homme et son destin d’après les penseurs du moyen âge*, Actes de premier Congrès international de philosophie médiévale, Louvain-Paris, 1960, p.781.
- 18) R.Macken, *Bibliotheca manuscripta Henrici de Gandavo*, I, Catalogue A-P & II, Catalogue Q-Z. (Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, I & II), Leuven:Leiden, 1979.
- 19) cf. Stephen Dumont, “Henry of Ghent and Duns Scotus”, in *Medieval Philosophy*, ed. John Marenbon, Routledge History of Philosophy vol. III, London & N.Y., 1998, pp.291-328 (pp.292-93); Gordon A. Wilson, “Henry of Ghent’s Written …”, 2011, pp.16-18.

Henricus de Gandavo, *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.1¹

PROLOGUS

Quia *theologia* est scientia in qua est *sermo de Deo* et de rebus divinis, ut dicit AUGUSTINUS VIII^o De civitate Dei — dicitur enim *theologia* quasi ‘deologia’ a ‘Theos’ Graece, quod est ‘Deus’ Latine, et ‘logos’, <quod est> ‘sermo’ vel ‘ratio’, quasi sermo vel ratio de Deo et de rebus divinis —, ideo quaeritur hic primo quomodo *theologia* de Deo et de rebus divinis sit scientia; secundo quomodo in ea de Deo et de rebus divinis locutio sit habenda; tertio quae et qualia in ea de Deo et de rebus divinis sint cognoscenda. Ut autem iuxta processum AUGUSTINI et eius intentionem in libris De Academicis «*argumenta eorum quae multis ingerunt veri inveniendi desperatio*», dicentium scilicet «*omnia esse incerta*» et «*nihil posse sciri*», «*quantis possumus rationibus amoveantur*», paulo altius ordiendo quaerendum est hic primo de scientia et scibili communiter et in generali; secundo de scientia et scibili propriis *theologiae* in speciali. Et quia sacra scriptura solummodo ad hominis instructionem tradita est secundum APOSTOLUM dicentem: «*quaecumque scripta sunt ad nostram doctrinam scripta sunt*», ideo omnia hic dubitanda ad scientiam humanae instructionis sunt referenda.

Quantum igitur pertinet ad possibilitatem humanae cognitionis, circa primum praedictorum quaerenda sunt hic quinque: primum de possibilitate sciendi; secundum de modo sciendi; tertium de qualitate scibilium; quartum de appetitu sciendi; quintum de studio sciendi.

ARTICULUS I DE POSSIBILITATE SCIENDI

Circa possibilitatem sciendi quantum ad hominem pertinet, quaerenda sunt hic duodecim: primum, si contingat hominem aliquid scire; secundum, si contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione; tertium, si homo cognoscat lucem divinam qua cognoscit alia; quartum, si contingat hominem scire a natura an ab acquisitione; quintum, si contingat hominem acquirere scientiam per se ipsum; sextum, si contingat hominem acquirere scientiam alio homine docente; septimum, si homo acquirat scientiam Deo in quolibet actu discendi docente; octavum, si

ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.1¹

序言

アウグスティヌスが『神の国』第 VIII 巻で言うように²⁾、神学は神および神的な事柄について論じる学知である——じっさい、それがテオロギアと言われるのは、ギリシャ語「テオス」、ラテン語では「デウス (神)」³⁾と、ギリシャ語「ロゴス」、ラテン語では「セルモ (論説)」ないし「ラチオ (論理)」からなる、いわば「デオロギア」、いわば神および神的な事柄についての論説ないし論理、のような意味においてである——。それゆえ、ここで次のことが問われる。第一に、神および神的な事柄について論じる神学は、どのような意味で学知であるか；第二に、神および神的な事柄について論じる神学において、どのように語られるべきか；第三に、神および神的な事柄について論じる神学において、何がそしてどのような類のことが認識されるべきか。さて、アウグスティヌスの手続きとアカデメイア派に関する書における彼の意図に則して、《真を見出そうとする絶望を多くの人々に与える人々の議論》⁴⁾、すなわち《すべては不確実である》⁵⁾、《何も知ることはできない》⁶⁾と語る人々の議論を、《できるかぎり理性によって取り除くために》⁷⁾、もう少し深く始めて、ここで [第 1 項-第 20 項] まず第一に、知識と知られうるもの一般について、第二に、専門的に神学に固有な知識と知られうるものについて、探求しなければならない。そして、《何であれ書かれたことは、我々に教えるために書かれた》⁸⁾と語る使徒 [パウロ] によれば、聖書はただ人間の教育のためにのみ伝えられてきたのであるから、ここで問われるべきことはすべて、人間教育のための知識へと関連付けられなければならない。

したがって、上述の第一の問題 [知識と知られうるもの一般] について、人間の認識の可能性に関する以下の 5 つが考察されなければならない。第 1、知ることの可能性について、第 2、知ることの様態について、第 3、知られうるものの質について、第 4、知りたいという欲求について、第 5、知ろうとする探求心について、である。

第 1 項 知ることの可能性について

知ることの可能性について、人間に関する限りにおいて、以下の 12 が問われなければならない。1. 人間は何かを知りうるのか；2. 人間は何かを神の照明なしに知りうるのか；3. 人間が他のものを認識するための神の光を人間は認識するのか；4. 人間は自然本性によって知りうるのか、それとも獲得によってなのか；5. 人間は自己自身によって知識を獲得しうるのか；6. 人間は他者の教えによって知識を獲得しうるのか；7. 人間はどんな学習の現実活動においても

contingat hominem acquirere scientiam angelo docente; nonum, si acquirens per se scientiam potest dici se ipsum docere; decimum, si contingat hominem acquirere scientiam nihil praesciendo; undecimum, si notitia praecedens omnem scientiam acquisitam sit homini innata; duodecimum, si contingat hominem aequo primo sine discursu cuiuslibet rei scientiam acquirere.

QUAESTIO 1 UTRUM CONTINGAT HOMINEM ALIQUID SCIRE

Circa primum istorum arguitur quod non contingit hominem scire quidquid.

Primo ex parte modi sciendi sic. Quidquid scit homo scit ex priori et notiori sibi, I^o Posteriorum et I^o Physicorum . Sic autem non contingit eum scire aliquid nisi sciendo illud per prius et notius eo, et eadem ratione illud per aliud prius et notius illo, et sic in infinitum. Sic autem procedendo ad scientiam nihil contingit scire omnino, secundum PHILOSOPHUM II^o Metaphysicae . Ergo etc.

Secundo ex parte medii quo scitur sic. Omnis humana cognitio intellectiva ortum habet a sensu, I^o Metaphysicae et II^o Posteriorum. Sed «*a sensibus corporis sincera veritas non est expetenda*» secundum AUGUSTINUM 83 Quaestionum q.^e 9^a. Ergo cognitione intellectiva non potest homo scire sinceram veritatem. Sed non contingit hominem scire nisi sciendo sinceram veritatem, quia nihil scitur nisi verum, I^o Posteriorum , et non est veritas nisi sit sincera, id est, pura a falsitate secundum AUGUSTINUM 83 Quaestionum q.^e 1^a. Ergo etc.

Tertio ex eodem medio arguebant negantes scientiam, sicut habetur IV^o Metaphysicae, sic. Sensus nihil certi apprehendit de re, quia si aliquid apparet uni de re aliqua, contrarium eius apparet alteri de eadem, et quod apparet uni in uno tempore et in una dispositione, contrarium eius apparet eidem in alio tempore et in alia dispositione. Quare cum intellectus nihil apprehendit nisi a sensu, intellectus nihil certi potest apprehendere de re quacumque. Non potest autem esse scientia nisi apprehendendo aliquid certum et determinatum secundum PHILOSOPHUM VI^o Metaphysicae. Ergo etc.

神の教えによって知識を獲得するのか；8. 人間は天使の教えによって知識を獲得しうるのか；9. 自己によって知識を獲得する者は自己自身を教えると言えるのか；10. 先行的に何も知ることなしに人間は知識を獲得しうるのか；11. すべての獲得知識に先行する知が人間に生得的にあるのか；12. 等しく最初は論証なしに人間は何であれものの知識を獲得しうるのか。

第1問 人間は何かを知りうるのか

第1問については、人間は何も知りえないと、論じられるべきである。

第1 [異論]：知り方の側から、以下のように [論じられる]。『分析論後書』第I巻⁹⁾および『自然学』第I巻¹⁰⁾によれば、人間は、何であれ知ること [A] を、先行し自分にとってよりよく知られているもの [B] によって知る。しかし、このように人間が何か [B] を知ることができるためには、先行しよりよく知られているもの [C] によって、それ [B] を知っていなければならない、同じ理由で、先行しよりよく知られているもの [D] によって、それ [C] を知っていなければならない、こうして無限に [進行する]。しかし、『形而上学』第II巻¹¹⁾によれば、このように [無限に] 知識へ向かって進行することによって、まったく何も知ることができない。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

第2 [異論]：知るための媒体の側から、以下のように [論じられる]。『形而上学』第I巻¹²⁾および『分析論後書』第II巻¹³⁾によれば、人間の知的認識はすべて感覚に起源を有する。しかし、アウグスティヌス『83問題集』第9問によれば、《純正真理は身体感覚からは求められるべきではない》¹⁴⁾。それゆえ、人間は知的認識によって純正真理を知ることにはできない。しかし、人間は、純正真理を知ることによってしか、[何かを] 知ることにはできない。なぜなら、『分析論後書』第I巻¹⁵⁾によれば、真なるものしか知られず、また、『83問題集』第1問¹⁶⁾によれば、純正真理すなわち偽を免れた真理以外に、真理は存在しないからである。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

第3 [異論]：同じく、知るための媒体の側から、知識を否定する人々は、『形而上学』第IV巻によれば¹⁷⁾、以下のように論じた。感覚はものについて確実なことは何も把握しない。なぜなら、あるものについて、ある人にある何かが見れるならば、同じものについて、別の人にはその反対が見れるからであり、ある何かがある人にある時ある状態で現れるならば、同じ人に別の特別な状態でその反対が見れるからである。したがって、知性は、感覚から来るものしか把握しないので、何であれものについて確実なことは何も把握できない。しかし、『形而上学』第VI巻によれば¹⁸⁾、確実に確定的な何かを把握することによってしか、知識はありえない。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

Quarto ex parte scibilis, et est similiter argumentum eorum IV^o Metaphysicae , sic. Scientia non est nisi de fixo et permanenti secundum BOETHIUM I^o Arithmeticae . In rebus autem sensibilibus, ex quibus habetur omnis humana cognitio mediante sensu, non est aliquid fixum aut permanens secundum AUGUSTINUM, qui dicit 83 Quaestionum q.^e 9^a, «*Quod sensibile dicitur sine ulla intermissione temporis commutatur*». Ergo etc.

Quinto ex parte scientis, et est argumentum MENONIS quo negabat scientiam in principio Posteriorum , ut dicit COMMENTATOR super IX^{um} Metaphysicae , sic. «*Nemo addiscit nisi qui aliquid novit*», secundum AUGUSTINUM III^o De Academicis et PHILOSOPHUM IX^o Metaphysicae . Qui autem aliquid novit non addiscit, quia «*discere est motus ad sciendum*». Nemo ergo est qui aliquid addiscit. «*Nemo autem potest habere disciplinam qui nihil didicit*», secundum AUGUSTINUM ibidem. Ergo etc.

Sexto arguitur ex eodem medio aliter formando argumentum sic. «*Nihil addiscit qui nihil novit. Non potest autem habere disciplinam qui nihil addiscit*». Ergo «*non potest habere disciplinam qui nihil novit*». Homo quilibet ab initio nihil novit, quia intellectus humanus, antequam recipiat species, est «*sicut tabula nuda in qua nihil depictum est*», ut dicitur in III^o De anima . Ergo etc.

Septimo ex parte obiecti sic. Ille non potest scire rem qui non percipit essentiam et quidditatem rei, sed solum idolum eius, quia non novit Herculem qui solum vidit picturam eius. Homo autem nihil percipit de re nisi solum idolum eius ut speciem receptam per sensus, quae idolum rei est, non ipsa res. «*Lapis enim non est in anima, sed species lapidis*». Ergo etc.

In contrarium arguitur primo argumento COMMENTATORIS super principium II^o Metaphysicae sic. «*Desiderium naturale non est frustra*». «*Homo*», secundum PHILOSOPHUM in principio Metaphysicae , «*natura scire desiderat*». Ergo desiderium hominis ad scire non est frustra. Esset autem frustra, nisi contingeret eum scire. Ergo etc.

第4 [異論]: 知られる対象の側から、同様に『形而上学』第IV巻¹⁹⁾によれば、彼ら [知識を否定する人々] の論は、以下のように [論じられる]。ボエティウス『算術論』第I巻²⁰⁾によれば、知識は堅固で永続的なものについてしかない。しかし、『83問題集』第9問において《可感的と言われるものは時間の中断なしに変化する》²¹⁾と言うアウグスティヌスによれば、感覚を介して人間のすべての認識の出発点となる可感的なものにおいて、堅固で永続的なものは何もない。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

第5 [異論]: 知る者の側から、『形而上学』第IX巻への注解でアヴェロエスが言うように²²⁾、知識を否定するメノンの論が、『分析論後書』第I巻²³⁾において、以下のように [論じられる]。アウグスティヌス『アカデメイア派駁論』第III巻²⁴⁾、およびアリストテレス『形而上学』第IX巻²⁵⁾によれば、《何かを知っている人以外は誰も学んでいない》。しかし、《学ぶことは知ることへの運動である》から、何かを知っている人は学ばない。それゆえ、何かを学ぶ人はいない。同所のアウグスティヌスによれば、《何も学ばなかった人は学知を持つことができない》²⁶⁾。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

第6 [異論]: 同様に、知る者の側から、別様に論を構成することによって、次のように [論じられる]。《何も知らない人は何も学んでいない。しかし、何も学ばない人は学知を持つことができない》²⁷⁾。それゆえ、《何も知らない人は学知を持つことができない》。人間は誰でも最初は何も知らない。なぜなら、『デ・アニマ』第III巻に言われるように、人間知性は形象を受け取る前は、《何も描かれていない白板のようなもの》²⁸⁾だからである。それゆえ、[人間は何も知りえない]

第7 [異論]: 対象の側から、以下のように [論じられる]。ものの本質や何性ではなくその偶像しか知覚しない人は、ものを知ることはできない。なぜなら、ヘラクレスの画像しか見ていない人は、彼を知らないからである。しかし、人間はものについて、感覚を通して受け取られた形象としての偶像しか知覚しない。そのような形象はもの自体ではなくものの偶像にすぎない。というのも《魂の中にあるのは石ではなく、石の形象である》²⁹⁾からである。それゆえ、[人間は何も知りえない]。

反対に [人間は何かを知りうる] 論じられる。第1 [反対異論] に、『形而上学』第II巻第1章へのアヴェロエスの注解において、以下のように [論じられる]。《自然的欲求は無駄ではない》³⁰⁾。アリストテレス『形而上学』第I巻によれば、《人間は知ることを自然本性において欲する》³¹⁾。それゆえ、知りたいという人間の欲求は無駄にはならない。しかるに、もし人間が知ることができずれば、その欲求が無駄であることになるだろう。それゆえ、[人間は何かを知りうる]。

Secundo ex eodem medio aliter formando argumentum sic. Quod homo naturaliter desiderat possibile est ei contingere. Secundum enim quod dicit AUGUSTINUS IV^o Co ntra Iulianum , «*Neque omnes homines naturali instinctu beati esse vellemus nisi esse possemus*». «*Homo naturaliter scire desiderat*». Ergo etc.

Tertio adhuc quasi ex eodem medio sic. Unumquodque potest attingere suam perfectionem ad quam naturaliter ordinatur, quia aliter esset frustra. Scire est hominis perfectio ad quam naturaliter ordinatur, quia «in scientia *speculativa* consistit eius *felicitas*», secundum PHILOSOPHUM X^o Ethicorum . Ergo etc.

Quarto sic. PHILOSOPHUS dicit III^o et IV^o Metaphysicae et II^o Caeli et mundi : Quod non potest compleri impossibile est ut incipiat fieri ab agente per naturam vel per rationem, quia omnis motus habet finem et complementum propter quem est. Sed secundum eundem I^o Metaphysicae «*homines philosophati sunt et prudentiam primo inceperunt investigare propter id quod est scire et intelligere et fugere ignorantiam*». Possibile est ergo hominem scire et intelligere.

Quinto sic. Secundum AUGUSTINUM De vera religione , «*qui dubitat an contingat aliquid scire se dubitare non dubitat, sed certus est*». Non est autem certus nisi de vero quod scit. Ergo illum qui dubitat se scire necesse est concedere se aliquid scire. Hoc autem non esset, nisi contingeret eum aliquid scire cum contingit eum dubitare. Ergo etc.

Sexto quasi eadem via arguunt PHILOSOPHUS et eius COMMENTATOR IV^o Metaphysicae sic. Qui negat scientiam esse dicit in hoc quia certus est quod non est scientia; et non est certus nisi de aliquo quod scit; ergo qui negat scientiam esse et quod hominem non contingit scire necesse habet concedere scientiam esse et quia contingit hominem aliquid scire. Et est haec ratio consimilis rationi illi qua PHILOSOPHUS concludit in IV^o Metaphysicae quod illum «*qui negat loquelam esse necesse est concedere loquelam esse*».

第2 [反対異論] に、同じ観点で、別様に論を構成して、以下のように [論じられる]。人間が自然本性的に欲することはその人に起こりうる。じっさい、アウグスティヌスが『ユリアヌス駁論』において言うところによれば、《我々すべての人間が至福であることを自然的本能によって望んでいるわけではない。それが可能なら別だが》³²⁾。《人間は自然本性的に知ることを欲する》。それゆえ、[人間は何かを知りうる]。

第3 [反対異論] に、さらにいわば同じ観点で、以下のように [論じられる]。何であれものは、自然本性的に秩序づけられている自らの完全性を達成することが可能である。なぜなら、もしそうでなければ、それが無駄になるだろうからである。知ることは、人間が自然本性的に秩序づけられている自らの完全性である。なぜなら、アリストテレス『ニコマコス倫理学』第X巻によれば、《人間の幸福は思弁的知識において成立する》³³⁾からである。それゆえ、[人間は何かを知りうる]。

第4 [反対異論] に、以下のように [論じられる]。アリストテレスは『形而上学』³⁴⁾ 第III巻と第IV巻、および『天体論』第II巻³⁵⁾において、次のように言う：完成不可能なことは、自然的作用者であれ理性的作用者であれ、それを開始できない。なぜなら、あらゆる運動には、その存在理由としての目的と到達点があるからである。しかし、アリストテレス『形而上学』第I巻によれば、《人間は、知ること、知性認識すること、そして無知から脱することのために哲学し、最初に賢慮を探し求め始めた》³⁶⁾。それゆえ、人間が知ること、知性認識することは可能である。

第5 [反対異論] に、以下のように [論じられる]。アウグスティヌス『真の宗教』によれば、《何かを知ることができるかと疑う人は、自分が疑っていることは疑っておらず、それを確信している》³⁷⁾。しかし、人は自分が知っている真なるものについてしか確信しない。それゆえ、自分が知っていることを疑う人は、自分が何かを知っていることを容認しなければならない。しかし、その人がたまたま疑っているとき、その人がたまたま何かを知っているものでなければ、このようなことはないだろう。それゆえ、[人間は何かを知りうる]。

第6 [反対異論] に、いわば同じ仕方で、アリストテレスもアヴェロエスも、『形而上学』第IV巻で³⁸⁾、以下のように論じている。知識があることを否定する人は、知識がないことが確かであるという言い方をする。しかし、人が何かを確信できるのは自分が知っていることについてだけである。それゆえ、知識があること、そして人間が何かを知りうることを否定する人は、必然的に、知識があること、そして人間が何かを知りうることを容認しなければならない。この論は、アリストテレスが『形而上学』第IV巻において³⁹⁾、《言葉があることを否定する人は、必然的に、言葉があることを容認しなければならない》と結論するときの論拠と類似する。

<SOLUTIO>

Dicendum quod scire large accepto ad omnem notitiam certam qua cognoscitur res sicut est absque omni fallacia et deceptione, et sic intellecta et proposita quaestione contra negantes scientiam et omnem veritatis perceptionem, manifestum est et clarum quia contingit hominem scire aliquid, et hoc secundum omnem modum sciendi et cognoscendi. Scire enim potest aliquis rem aliquam dupliciter: vel testimonio alieno et exteriori vel testimonio proprio et interiori.

Quod primo modo contingit aliquid scire, dicit AUGUSTINUS contra ACADEMICOS XV^o De Trinitate cap.^o 12^o. «Absit», inquit, «ut scire nos negemus quae testimonio didicimus aliorum. Alioquin nescimus oceanum nec scimus esse terras atque urbes, quas celeberrima fama commendat; nescimus fuisse homines et opera eorum, quae historica lectione didicimus; postremo nescimus in quibus locis vel ex quibus hominibus fuerimus exorti, quia haec omnia testimoniis didicimus aliorum».

Quod autem secundo modo contingit aliquid scire et rem percipere sicuti est, manifestum est ex eis quae experimur in nobis et circa nos, et hoc tam in cognitione sensitiva quam intellectiva. In cognitione enim sensitiva sensus ille vere rem percipit, sicuti est sine omni deceptione et fallacia, cui in actione propria sentiendi suum proprium obiectum non contradicit aliquis sensus verior vel intellectus acceptus ab alio sensu veriori, sive in eodem sive in alio. Nec de eo quod sic percipimus dubitandum est quin percipiamus ipsum sicuti est. Nec oportet in hoc aliquam aliam ulteriorem causam certitudinis quaerere, quia, ut dicit PHILOSOPHUS, «quaerere rationem cuius habemus sensum, infirmitas intellectus est; cuius enim dignius habemus aliquid quam rationem, non est quaerenda ratio». Experimentum enim sermonum verorum est ut convenient rebus sensatis. Hinc est quod dicit AUGUSTINUS ubi supra: «Absit a nobis ut ea quae per sensus corporis didicimus vera esse dubitemus. Per eos enim didicimus caelum et terram et ea quae in eis nobis nota sunt». Hinc etiam TULLIUS in libro suo De Academicis, volens probare contra Academicos quia contingit aliquid certitudinaliter scire, dicit sic: «Ordiamur a sensibus, quorum ita clara iudicia et certa sunt ut si optio naturae detur, non videam quid quaeratur amplius. Meo iudicio maxima est in sensibus veritas, si et sani sunt ac valentes et omnia remouentur quae obstant et impediunt. Aspectus ipse fidem facit sui iudicii».

<解答>

言われなければならない。知ることが、あらゆる誤謬や欺きを免れ、あるがままのものを認識するためのあらゆる確実な知の意味で広く受け取られる場合 (A)、そして、そのような意味でこの問い「人間は何かを知りうるのか」が理解され、[この問いが] 知識とあらゆる真理の知覚を否定する人々に対して立てられるなら、人間が何かを知ることができ、しかも知ることと認識することのあらゆる様態においてそうであることは、明らかであり明晰である。じっさい、人は何らかのものを二つの仕方で：他者の外からの証言によって (A1)、または自身の内からの証言によって (A2)、知ることができる。

第一の仕方 (A1) 何かを知ることができることを、アウグスティヌスは『三位一体論』第15巻においてアカデメイア派に反駁して次のように言う。《他者の証言によって学んだことを我々が知っているということを否定しないように。そうでなければ、我々は大海も知らず、有名な人たちが賞賛している土地や都市が存在することも、我々は知らないことになる。歴史書を読むことから学んだ人物や彼らの行為が存在したことを、我々は知らないことになる。ついには、我々はいかなる場所にいかなる民族から出てきたのかを、知らないことになる。なぜなら、これらはすべて他者の証言によって学んだからである》⁴⁰⁾。

これに対して、第二の仕方 (A2) 何かを知り、あるがままのものを知覚することができることは、我々が、感覚的認識 (A2-1) であれ知的認識 (A2-2) であれ、自分の内や自分の周りに経験する諸々のことから明らかである。じっさい、感覚的認識の場合、固有対象を感覚するという固有の活動において、あるより真なる感覚あるいは他のより真なる感覚——同一人物であれ、別の人物であれ——から受け取られた知性と矛盾しない感覚は、ものを真なる仕方、あらゆる欺きや誤謬なしにあるがままに知覚する。そして、我々があるがままにものを知覚するというまさにそのような仕方知覚するものについて、疑うべきでもない。そして、この点で、確実性のさらなる他の原因を求めるべきでもない。というのも、哲学者 [アリストテレス] が言うように、《我々が感覚している対象の根拠を求めることは知性の弱さであり、根拠よりも優れたものが属するものについて根拠を求めるべきではない》からである。というのも、感覚されたものについて一致するということが、真なる陳述の証拠だからである。こうして、アウグスティヌスは上述の箇所 (『三位一体論』第15巻 12.21) で言う。《我々は、身体感覚によって学び知ったものが真であることを疑ってはならない。じっさい、我々は身体感覚によって天地を、そして天地の中で我々に知られていることを学び知ったのである》⁴¹⁾。こうして、キケロもまた『アカデメイア派について』の書の中で、アカデメイア派に反対して、何かを確実に知ることができるということを証明しようとして、言う。《我々は感覚から始める。感覚的判断は非常に明晰で確実であるから、自然に選択肢が与えられたとしても、感覚以上には何も求められないと私は思う。私の判断では、感覚が健全かつ強力で、感覚を妨げ損なうあらゆるものが取り除かれるならば、感覚の中には最高の真理がある。視覚そのものが、視覚的判断に確信を生み出すのである》⁴²⁾。

De fide vero in cognitione intellectiva, quia contingit per eam aliquid vere scire sicuti est, statim subiungit ibidem dicens: «*At qualia sunt haec quae de sensibus percipi dicimus, talia sequuntur ea quae non sensibus percipi dicuntur, ut haec 'ille est albus, ille est canus'. Deinde sequuntur maiora, ut 'si homo est, animal est'. Quo ex genere notitia rerum nobis imprimatur*».

Cognitione igitur intellectiva, sicut iam dictum est de cognitione sensitiva, intellectus ille vere rem percipit, sicuti est sine omni deceptione et fallacia, cui in actione propria intelligendi non contradicit intellectus verior vel acceptus a sensu veriori. Nec de tali intellectu plus dubitandum est quam de sensu. Unde AUGUSTINUS ubi supra: «*Cum duo sunt genera rerum quae sciuntur, unum eorum quae per sensus corporis percipit animus, alterum eorum quae per se ipsum, multa illi philosophi (loquitur de ACADEMICIS) garrunt contra corporis sensus, cum tamen quasdam firmissimas per se ipsas perceptiones rerum verarum nequaquam in dubium vocare potuerunt, quale est illud, 'scio me vivere'*». «In quo non metuimus ne aliqua veri similitudine fallamur, quoniam certum est eum qui fallitur vivere». «Ubi nec Academicus dicere potest: 'fortassis dormis et nescis et in somniis vides,' quia nec in ea scientia per somnia falli potest, quia et dormire et in somniis videre viventis est. Nec illud Academicus dicere potest: 'furus fortassis et nescis,' quia sanorum visis similia sunt etiam visa furentium. Sed qui furit vivit, nec contradicit Academicus. Non ergo fallitur nec mentiri potest qui dixerit scire se vivere». Nec de hoc alia probatio requirenda est quam illa quae habetur ex exercitio intellectus et per signa evidentia a posteriori, qualia inferius ponentur. (to be continued)

しかし、知性的認識によって何かを真なる仕方であるがままに認識することができるという、知性的認識における確信について、彼 [キケロ] は同所において直ちに付け加えて言う。《感覚によって知覚されると言われる事柄があると同様に、感覚によって知覚されると言われない事柄が後に続く。たとえば、前者は「それは白い、それは青白い」。そこから、もっと重大なこと、たとえば、「それが人間なら、それは動物である」が後に続く。このような種類のことから、ものの知が我々に刻印される》⁴³⁾。

したがって、感覚的認識について言われたことと同様、知性的認識の場合も、知性認識するという固有の活動において、より真なる知性あるいはより真なる感覚から受け取られた知性と矛盾しない知性は、ものを真なる仕方、あらゆる欺きや誤謬なしにあるがままに知覚する。そのような知性について疑うべきでないのは、感覚について疑うべきでないのと同じである。こうして、アウグスティヌスは上述の箇所で言う。《知られるものに二種類ある。そのうちの一つ (A2-1) を、心は身体感覚によって知覚し、もう一つ (A2-2) を、[心は] それ自身によって知覚する。それゆえ、これらの哲学者たち-アカデメイア派について言われている-は、身体感覚に反対することを色々言うが、真なるものに関する、それ自体によってもっとも堅固なある種の知覚を彼らは決して疑うことはできなかった。そのようなものとして「私が生きていることを私は知っている」がある》⁴⁴⁾。《この点で、我々が真らしき何かによって欺かれるのではないかと恐れることはない。なぜなら、欺かれる人が生きていることは確実だからである》⁴⁵⁾。《この点では、アカデメイア派も「おそらく貴方は眠っており、知っているのではなく、夢の中で見ているのだろう」とは言えない。なぜなら、眠ることも夢の中で見ることも生者に属するので、その知に関して夢によって欺かれることはありえないからである。アカデメイア派は「狂人の見ることも健常人の見ることに似ているから、おそらく貴方は狂っており、知ってはいない」と言うこともできない。狂人も生きており、アカデメイア派もこれに反駁はしない。それゆえ、自分が生きていることを知っていると言った者は、欺かれてもいないし嘘をついていることもあり得ない》⁴⁶⁾。このことに関して、知性の行使によって、そしてア・ポステリオリに明らかな印によって得られたもの以外の証明が求められるべきではない。 (未完)

訳注

- 1) *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. “The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press.”
- 2) cf. Augustinus, *De civitate Dei*, VIII, c.1. *Corpus Christianorum Series Latina* (CCSL と略す), 47, Aurelii Augustini opera, pars14, 1, p.216, 17-217, 25: Neque enim hoc opere omnes omnium philosophorum uanas opiniones refutare suscepi, sed eas tantum, **quae ad theologian pertinent, quo uerbo Graeco significari intellegimus de diuinitate rationem siue sermonem**; nec eas omnium, sed eorum tantum, qui cum et esse diuinitatem et humana curare consentiant, non tamen sufficere unius incommutabilis Dei cultum ad uitam adipiscendam etiam post mortem beatam, sed multos ab illo sane uno conditos atque institutos ob eam causam colendos putant. 「ゆえに、わたしはここでの作業で、すべての哲学者たちの、あらゆる誤謬に満ちた見解を論駁しようとして企てているのではない。ただ神学——このギリシア語によって、わたしたちは聖なるもの(神)に関する理論ないし学説を意味するものと理解している——に関する誤れる見解だけを論駁しようと思う。また、わたしは、あらゆる哲学者たちの神学に関する誤れる見解をもれなく論駁するつもりはない。ただ、わたしは、聖なるものが存在することや、それが人間の事柄を配慮することには同意しているものの、唯一不変なる神に対する礼拝が〔現世においてはもちろん〕死後においてさえ至福の生に達するための基礎であると考えず、そうした至福の生を得るためには、その唯一なる神によって創造され秩序づけられた多くの神々を礼拝すべきであると考えている哲学者たちの誤れる見解を論駁しようと思うのである。』『神の国』茂泉昭男・野町啓訳、『アウグスティヌス著作集12』教文館、1982、p.162。(ヘンリクスの参照箇所を太字で示した。以下、同様)。なお、アウグスティヌスのラテン語テキストからの引用は、主として CCSL からとするが、場合によって *Corpus scriptorum ecclesiasticorum Latinorum* (CSEL)、あるいは *Patrologiae cursus completus, accurante J.-P. Migne, Series Latina* (PL) を使用する。アウグスティヌス引用箇所の日本語訳は、主として『アウグスティヌス著作集』教文館を使用する。また、アウグスティヌスからの引用箇所の特定について平野和歌子さん(京大大学院文学研究科博士課程)のお世話になった。ここに記して感謝する。
- 3) cf. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, q.1, a.7, sed contra [Marietti] : illud est subjectum scientiae, de quo est sermo in scientia. Sed in hac scientia fit sermo de Deo: dicitur enim *theologia*, quasi *sermo de Deo*. Ergo Deus est subiectum huius scientiae. 「学知における論説(セルモ)の対象となるものは、その学知の主題である。ところで、この学知においては神についての論説がなされる。というのも、『テオロギア』とは、いわば『神についての論説』だからである。それゆえ、神はこの学知の主題である」。なお、トマス・アクィナスのラテン語テキストからの引用は、*S. Thomae Aquinatis SUMMAE THEOLOGIAE*, cura et studio Sac. Petri Caramello, cum textu ex recensione Leonina, Marietti, 1952 を使用する。アクィナス引用箇所の日本語訳は、基本的に訳者のものであるが、『神學大全』創文社を適宜参照した。
- 4) Augustinus, *Retractationes*, I, c.1, n.1. CCSL 57, p.7, 2-10: Cum ergo reliquissem uel quae adeptus fueram in cupiditatibus huius mundi uel quae adipisci uolebam, et me ad christianae uitae otium contulissem, nondum baptizatus contra Academicos uel de Academicis primum scripsi, **ut argumenta eorum, quae multis ingerunt ueri inueniendi desperationem**, et prohibent cuiquam rei assentiri

et omnino aliquid tamquam manifestum certumque sit adprobare sapientem, cum eis omnia uideantur obscura et incerta, ab animo meo, quia et me mouebant, **quantis possem rationibus amouerem**. 「わたしがこの世のむなしい欲望に従って獲得したもの、あるいは、獲得しようと欲していたものを放棄して、いまだ洗礼を受けてはいなかったが、キリスト教徒の静かな生活を始めた時、わたしはまず、『アカデミア派駁論』ないしは『アカデミア派論』という書物を書いた。この書物は、アカデミア派の人々の論証が、多くの人々を真理発見に対する絶望に落とし入れ、知者は何ものにてあれ同意してはならず、また、すべてのものは知者によって不確実であるから、たとえ明瞭であり確実なものであろうと、いかなるものも認めてはならぬ、と教えていたので、このような論証をわたしの心から遠ざけるため、可能な限り堅固な諸根拠によって書くようにと動かされたからである。』『再考録』清水正照訳、『アウグスティヌス著作集1』教文館、1979、p.155。

- 5) Augustinus, *Contra Academicos*, II, c.5, n.11. CCSL 29, p.24, 9-10: Et **omnia incerta esse** non dicebant solum uerum etiam copiosissimis rationibus adfirmabant. 「アカデミア派の人々は、すべてのことは不確実であると言うだけでなく、きわめて豊富な根拠でもって確言した。』『アカデミア派駁論』清水正照訳、『アウグスティヌス著作集1』教文館、1979、pp.61-62。
- 6) Augustinus, *op., cit.*, III, c.5, n.12. CCSL 29, p.41, 29-31: Deinde si quid iam remanet cum his conflictionis, non ex eo est, quod dicunt, **nihil sciri posse**, sed ex eo, quod nulli rei assentiendum esse contendunt. 「そこで第二にわたしたちが彼ら〔アカデミア派〕と論じ合うべきことがまだあるとすれば、それは何も知られないということについてではなく、いかなるものにも同意してはならないと言って彼らが抗弁しているそのことなのである。』『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.62。
- 7) Augustinus, *Retractationes*, I, c.1, n.1. 注4の“**quantis possem rationibus amouerem**”参照。
- 8) *Rom.*, XV, 4 「これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。』『ローマ人への手紙』15:4、日本聖書協会、1985、p.252。
- 9) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, 1, 71a1-2: Πᾶσα διδασκαλία καὶ πᾶσα μάθησις διανοητικὴ ἐκ προϋπαρχούσης γίνεται γνῶσεως. 「思考のはたらきによる、すべての教授、すべての学習は、どれもみな、〔学習者の内に〕予め存する認識から生まれてくる。』『分析論後書』加藤信朗訳、『アリストテレス全集1』岩波書店、1971、p.613。なお、アリストテレスのデジタルテキストについて朴一功氏（大谷大教授）より貴重な情報を頂いた。ここに記して感謝する。
- 10) cf. Aristoteles, *Physica*, I, c.1, 184a16-17: πέφυκε δὲ ἐκ τῶν γνωριμωτέρων ἡμῖν ἡ δόξος καὶ σαφεστέρων ἐπὶ τὰ σαφέστερα τῆ φύσει καὶ γνωριμώτερα. 「ところで、そのための道は、われわれにとってより多く可知的でありより多く明晰であるものごとから出発して、自然においてより多く明晰でありより多く可知的であるものごとへと進むのが自然的である。』『自然学』出隆・岩崎允胤訳、『アリストテレス全集3』岩波書店、1968、p.3。
- 11) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, II, c.2, 994b20-24: ἔτι τὸ ἐπίστασθαι ἀναιρούσιν οἱ οὕτως λέγοντες, οὐ γὰρ οἶδόν τε εἰδέναι πρὶν εἰς τὰ ἄτομα ἐλθεῖν: καὶ τὸ γινώσκειν οὐκ ἔστιν, τὰ γὰρ οὕτως ἄπειρα πῶς ἐνδέχεται νοεῖν; 「なおまた、このように無限に分析しようと言う人々は認識を否定するものである。なぜなら、不可分なもの〔それ以上は分析しえない普遍概念〕に達しないかぎり知ることは不可能だからである。のみならず、たんなる知識もありえないことになる。なぜなら、いったいどうしてそのような無限なものどもが思惟されようか?』『形而上学』出隆訳、『アリストテレス全集12』岩波書店、1968、pp.56-7。
- 12) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.1, 980a27-981a6: φύσει μὲν οὖν αἴσθησιν ἔχοντα γίνεσθαι τὰ ζῷα,

ἐκ δὲ ταύτης τοῖς μὲν αὐτῶν οὐκ ἐγγίγνεται μνήμη, **τοῖς δ' ἐγγίγνεται**. ... τὰ μὲν οὖν ἄλλα ταῖς φαντασίαις ζῆ καὶ ταῖς μνήμαις, ἐμπειρίας δὲ μετέχει μικρόν: τὸ δὲ τῶν ἀνθρώπων γένος καὶ τέχνη καὶ λογισμοῖς. **γίγνεται δ' ἐκ τῆς μνήμης ἐμπειρία τοῖς ἀνθρώποις**: αἱ γὰρ πολλαὶ μνήμαι τοῦ αὐτοῦ πράγματος μιᾶς ἐμπειρίας δύναμιν ἀποτελοῦσιν. καὶ δοκεῖ σχεδὸν ἐπιστήμη καὶ τέχνη ὁμοίον εἶναι καὶ ἐμπειρία, **ἀποβαίνει δ' ἐπιστήμη καὶ τέχνη διὰ τῆς ἐμπειρίας τοῖς ἀνθρώποις**: ἡ μὲν γὰρ ἐμπειρία τέχνην ἐποίησεν, ὡς φησὶ Πῶλος, ἡ δ' ἀπειρία τύχην. γίγνεται δὲ τέχνη ὅταν ἐκ πολλῶν τῆς ἐμπειρίας ἐνοσημάτων μία καθόλου γένηται περὶ τῶν ὁμοίων ὑπόληψις. 「ところで、動物は、(1)感覚を有するものとして自然的に生れついている。(2)この感覚から記憶力が、或る種の動物には生じないが、或る他の種の動物には生じてくる。…さて、このように、他の諸動物は、表象や記憶で生きているが、経験を具有するものはきわめてまれである。しかるに、人間という類の動物は、さらに技術や推理力で生きている。ところで、(3)経験が人間に生じるのは、記憶からである。というのは、同じ事柄について多くの記憶がやがて一つの経験たるの力をもたらすからである。ところで、経験は、学問や技術とほとんど同様のものであるかのようにも思われているが、しかし実は、(4)学問や技術は経験を介して人間にもたらされるのである。けだし、『経験は技術を作ったが、無経験は偶運を』とポロスが言っているとおりである。さて、技術の生じるのは、経験の与える多くの心象から幾つかの同様の事柄について一つの普遍的な判断が作られたときなのである。」『形而上学』出隆訳、1968、pp.3-4。

13) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, II, c.19, 100a3-5: Ἐκ μὲν οὖν αἰσθήσεως γίνεται μνήμη, ὡς περ λέγομεν, ἐκ δὲ μνήμης πολλακίς τοῦ αὐτοῦ γινομένης ἐμπειρία: 「すでに述べたように、感覚からは記憶が生じ、同じものについて、繰り返して得られた記憶から経験が生ずる。」『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.770。

14) Augustinus, *De div. quaest.* 83, q.9

15) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, c.2, 71b25-26: ἀληθῆ μὲν οὖν δεῖ εἶναι, ὅτι οὐκ ἔστι τὸ μὴ ὄν ἐπίστασθαι, 「原理は真にあるものでなければならぬ。なぜならば、あらゆるものの知識をもつことはありえないからである。」『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.617。

16) cf. Augustinus, *De div. quaest.* 83, q.1

17) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.6, 1011a31-35: ἐπεὶ πρὸς γε τοὺς διὰ τὰς πάλαι εἰρημένας αἰτίας τὸ φαινόμενον φάσκοντας ἀληθῆς εἶναι, καὶ διὰ τοῦτο πάνθ' ὁμοίως εἶναι ψευδῆ καὶ ἀληθῆ: **οὔτε γὰρ ἅπανι ταυτὰ φαίνεσθαι οὔτε ταυτῶ ἀεὶ ταυτὰ, ἀλλὰ πολλακίς τάναντία κατὰ τὸν αὐτὸν χρόνον** (ἡ μὲν γὰρ ἀφή δῶο λέγει ἐν τῇ ἐπαλλάξει τῶν δακτύλων ἡ δ' ὄψις ἐν) 「そこでわれわれはこの人々に、—この人々は、先に述べたような理由で、現われを真実であると主張し、またこのゆえに、すべてをひとしく偽でもあり真でもあるとする、そしてそのゆえは、ものは必ずしもすべての人に同じに現われるはず、また同じ人に対しても常に同じではなくて、かえってしばしば同じ時にも反対に現われる(たとえば、指を交錯させてそこで或る一つのものに触れると、触角はこのものを二つであると告げるが、視覚はこのものを一つであると告げるからである) というのであるが、—この人々に対してわれわれはこう答える」『形而上学』出隆訳、1968、p.124。

18) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, VI, c.2, 1027a20-22: ἐπιστήμη οὐκ ἔστι τοῦ συμβεβηκότος φανερόν: **ἐπιστήμη μὲν γὰρ πᾶσα ἢ τοῦ ἀεὶ ἢ τοῦ ὡς ἐπὶ τὸ πολὺ** 「しかしとにかく、付帯的な物事に関しては学の存しないことは明白である。なぜなら、学〔認識〕はすべて、常にそうある物事かあるいは多くの場合にそうある物事かに関する認識だからである」『形而上学』出隆訳、1968、p.199。

19) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1010a6-9: ἔτι δὲ πᾶσαν ὁρῶντες ταύτην κινουμένην τὴν φύσιν, κατὰ δὲ τοῦ μεταβάλλοντος οὐθὲν ἀληθεύομενον, περὶ γε τὸ πάντη πάντως μεταβάλλον οὐκ ἐνδέχεσθαι

ἀληθεύειν. 「なおまた、この自然の全体が運動し変化しているのを見、しかもこのように転化する物事に関してはなんらの真実をも語りえないものと考えて、かれらは、あらゆるところであらゆる仕方
で転化するこのような物事については真実を語ることはできないと判断した。」『形而上学』出隆訳、
1968、pp.118-19。

20) Boethius, *De Institutione arithmetica*, I, c.1.

21) Augustinus, *De div. quaest.* 83, q.9

22) cf. Averroes, *Comm. in Metaph.*, IX (*Aristotelis Metaphysicorum libri XIII cum Averrois Cordubensis in eosdem Commentariis*), comm. 14 (Venetia: Junctas, 1568, vol.8, 240vL).

23) cf. Aristoteles, *Analytica Posteriora*, I, c.1, 71a29-30: εἰ δὲ μή, τὸ ἐν τῷ Μένωνι ἀπόρημα συμβήσεται· ἢ γὰρ οὐδὲν μαθήσεται ἢ ἂ οἶδεν. 「さもなければ、『メノン』のあのアポリアがそこから帰結するだろう。すなわち、ひとは何ごとをも学び知ることがないか、それとも〔すでに〕彼が知っているものを学び知ることのいずれかであることになるだろう。」『分析論後書』加藤信朗訳、1971、p.615。

24) Augustinus, *Contra Academicos.*, III, c.3, n.5. CCSL 29, p.37, 15-23: Si enim, ut subtiliter uereque dixisti, nihil inter sapientiae studiosum et sapientem interest, nisi quod iste amat, ille autem habet sapientiae disciplinam, — unde etiam nomen ipsum, id est, habitum quemdam exprimere non cunctatus es — **nemo autem habere disciplinam potest in animo, qui nihil didicit, nihil autem didicit, qui nihil nouit**, et nosse falsum nemo potest, nouit igitur sapiens ueritatem, quem disciplinam sapientiae habere in animo, id est habitum iam ipse confessus es. 「思うに、きみが鋭くまた正確に言ったように、知恵を求める者と知者との間には、前者は知恵の学知を愛し、後者はそれを所有しているということ以外には何の差異もないとすれば——そのためにあの名前自体、つまり一種の『所有』という言葉をも使うことをきみはためらわなかったのだが——**何も学ばなかった人は、自分の心に学知を所有することはできないし、何も知らない人は何も学ばなかった人である。**まただれも虚偽を知ることはできない。したがって、知者は真理を知っていることになる。そして知者は知恵の学知を心の中に持っている、つまり『所有』という言葉があてはまるものであることを、きみはたつた今認めただけなのである。」『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.93。

25) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IX, c.8, 1049b30-34: διὸ καὶ δοκεῖ ἀδύνατον εἶναι οἰκοδόμον εἶναι μὴ οἰκοδομήσαντα μὴθὲν ἢ καθαριστὴν μὴθὲν καθαρίσαντα: ὁ γὰρ μανθάνων καθαρίζειν καθαρίζων μανθάνει καθαρίζειν, ὁμοίως δὲ καὶ οἱ ἄλλοι. ὅθεν ὁ σοφιστικὸς ἔλεγχος ἐγένετο ὅτι οὐκ ἔχων τις τὴν ἐπιστήμην ποιήσει οὐ ἢ ἐπιστήμη: ὁ γὰρ **μανθάνων οὐκ ἔχει**. 「だからしてまた、なんらの建築活動をもしたことの無い者は建築家であること不可能であると考えられ、あるいは現に一度も弾琴したことの無い者は弾琴者でありえないと考えられもするのである。というわけは、弾琴を学習する者が弾琴を学習するのは、弾琴することによってだからである。そしてまたその他の学習者の場合でも同様である。ここからして、あのソフィスト的の駁論〔詭弁〕、すなわち、ひとは或る学問を有しないでもその学問の関することをなすであろう、なぜならそれを学習しつつある者はまだそれを有していないのだから、という詭弁も生まれたのである。」『形而上学』出隆訳、1968、pp.309-10。

26) Augustinus, *Contra Academicos.*, III, c.3, n.5. (注 24 参照)

27) *Ibid.*

28) cf. Aristoteles, *De anima*, III, c.4, 429b24-430a2: ὅτι δυνάμει πῶς ἐστί τὰ νοητὰ ὁ νοῦς, ἀλλ' ἐντελεχείᾳ οὐδὲν, πρὶν ἂν νοῆ· δυνάμει δ' οὕτως ὥσπερ ἐν **γραμματείῳ ᾧ μὴθὲν ἐνυπάρχει ἐντελεχείᾳ γεγραμμένον**· ὅπερ συμβαίνει ἐπὶ τοῦ νοῦ. 「思惟は、可能態においてはある意味で思惟されるものであるが、しかし現実態においては思惟する以前には何もものでもない、ということだったのである。

- か。そしてその可能態におけるあり方は、ちょうど、**現実態においてはそのなかに何一つ書き記されていない書板の状態に相当するが、まさにそれこそが思惟について起こる事態なのである。**』『魂について』中畑正志訳、『西洋古典叢書』京都大学学術出版会、2001、pp.153-4。
- 29) cf. Aristoteles, *De anima*, III, c.8, 431b26-432a1: τέμνεται οὖν ἡ ἐπιστήμη καὶ ἡ αἴσθησις εἰς τὰ πράγματα, ἢ μὲν δυνάμει εἰς τὰ δυνάμει, ἢ δ' ἐντελεχείᾳ εἰς τὰ ἐντελεχείᾳ· τῆς δὲ ψυχῆς τὸ αἰσθητικὸν καὶ τὸ ἐπιστημονικὸν δυνάμει ταῦτά ἐστι, τὸ μὲν <τὸ> ἐπιστητὸν τὸδὲ <τὸ> αἰσθητὸν. ἀνάγκη δ' ἢ αὐτὰ ἢ τὰ εἶδη εἶναι. αὐτὰ μὲν δὴ οὐ· **οὐ γὰρ ὁ λίθος ἐν τῇ ψυχῇ, ἀλλὰ τὸ εἶδος**· 「さてそこで、知識と感覚はその対象とする事物に応じて区分され、可能態にある知識と感覚は、可能態にある対象に対応し、現実態にある知識と感覚は、現実態にある対象に対応する。だが魂の感覚する能力と知識能力とは、可能態において、これら対象となる事物であり、つまりそれぞれ一方は知られるもの、他方は感覚されるものである。また知識能力と感覚する能力は、対象となるものそれ自身であるか、あるいはその形相であるかのいずれかでなければならない。さて、もちろん事物そのものではありえない。なぜなら魂のうちにあるのは石そのものではなくその形相だからである。』『魂について』中畑正志訳、2001、pp.166。
- 30) cf. Averroes, *Comm. in Metaph.*, II, comm. 1 (Venetia, 1568, 28vK)
- 31) Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.1, 980a21: πάντες ἄνθρωποι τοῦ εἶδέναι ὀρέγονται φύσει. 「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する。』『形而上学』出隆訳、1968、p.3。
- 32) Augustinus, *Contra Iul.*, IV, c.3, n.19. PL 44, 747: Neque enim omnes homines naturali instinctu immortales et beati esse vellemus, nisi esse possemus. 「わたしたちはすべての人々が自然の本能によって不滅であり至福であることを願っていない。もし彼らがそのようになし得るなら、話は別である。』『ユリアヌス駁論』金子晴勇訳、『アウグスティヌス著作集30』教文館、2002、p.208。(ヘンリクスの引用には immortales et はない)。
- 33) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, X, c.7, 1177a16-18: ἡ τοῦτου ἐνέργεια κατὰ τὴν οἰκίαν ἀρετὴν εἴη ἂν ἡ τελεία εὐδαιμονία. ὅπῃ δ' ἐστὶ θεωρητικὴ, εἴρηται. 「このような最善のものが、それに固有の徳に基づいて行う活動こそ、最も完全な幸福であるだろう。ところで、この活動が観想活動であることは、すでに言われていた。』『ニコマコス倫理学』朴一功訳、『西洋古典叢書』京都大学学術出版会、2002、p.474。
- 34) ヘンリクスのテキストには『形而上学』第III巻と第IV巻とあるが、実際には第II巻(II, c.2, 994b9-16)と第III巻(III, c.2, 996a22-29)である。cf. Aristoteles, *Metaphysica*, II, c.2, 994b9-16: ἔτι δὲ τὸ οὐ ἔνεκα τέλος, τοιοῦτον δὲ ὁ μὴ ἄλλου ἔνεκα ἀλλὰ τᾶλλα ἐκείνου, ὥστ' **εἰ μὲν ἔσται τοιοῦτόν τι ἔσχατον, οὐκ ἔσται ἄπειρον**, εἰ δὲ μὴθὲν τοιοῦτον, οὐκ ἔσται τὸ οὐ ἔνεκα, ἀλλ' οἱ τὸ ἄπειρον ποιῶντες λανθάνουσιν ἐξαιροῦντες τὴν τοῦ ἀγαθοῦ φύσιν (καίτοι οὐθεὶς ἂν ἐγχειρήσειεν οὐδὲν πράττειν μὴ μέλλον ἐπὶ πέρας ἦξειν): οὐδ' ἂν εἴη νοῦς ἐν τοῖς οὐσιν: **ἔνεκα γὰρ πινος ἀεὶ πράττει ὁ γε νοῦν ἔχων, τοῦτο δὲ ἐστὶ πέρας: τὸ γὰρ τέλος πέρας ἐστίν**. 「だがまた、生成がそのためにであるところのそれ〔すなわち生成の目的〕は、その終わりである。しかしそれは、他のなにものかのためにではなく、かえって他のものどもがそのためにであるところのそれであるからして、したがって、**もしなにか終局的なものがあれば、その生成過程は無限ではないであろう**。しかし、もしそのようなものが存在しないなら、そのためにであるそれ〔目的〕は存在しないことになろう、のみならずこの系列を無限であるとする人々は、知らず知らず善の真相を無視することになる、しかしなんびとも、或る限界に到達しようとの期待なしには、なにごとを行為しようともしないものなのに、それでもなおそのような人があるとすれば、それは理性が欠けているからであろう。いやしくも**理性を有する者は、なにかの**

ために行為する、そしてこのなにかが限界であり、目的は限界であるから。」『形而上学』出隆訳、1968、p.56。

- 35) cf. Aristoteles, *De caelo et mundo*, II, c.12, 292a13-18: Περί δὴ τούτων ζητεῖν μὲν καλῶς ἔχει καὶ τὴν ἐπὶ πλείων σύνεσιν, καίπερ μικρὰς ἔχοντας ἀφορμὰς καὶ τοσαύτην ἀπόστασιν ἀπέχοντας τῶν περὶ αὐτὰ συμβαινόντων· ὁμῶς δ' ἐκ τῶν τοιούτων θεωροῦσιν **οὐδὲν ἄλογον ἂν δόξειεν εἶναι τὸ νῦν ἀπορούμενον**. 「これらの難問については漸次理解をましていくようにするのがよいであろう。といっても、われわれは現在僅かの糸口しかもっておらず、またそれらの星のもとで起こっていることがらからは相当な距離はなれているのである。にもかかわらず、こうした〔制限された〕事情から出発して観察してゆくにしても、**当面の難問は決して説明のできないものではないことがわかるであろう。**」『天体論』村治能就訳、『アリストテレス全集4』岩波書店、1968、p.83。
- 36) Aristoteles, *Metaphysica*, I, c.2, 982b11-22: ὅτι δ' οὐ ποιητικὴ, δῆλον καὶ ἐκ τῶν πρώτων φιλοσοφησάντων: **διὰ γὰρ τὸ θαυμάζειν οἱ ἄνθρωποι** καὶ νῦν **καὶ τὸ πρώτον ἤρξαντο φιλοσοφεῖν**, ἐξ ἀρχῆς μὲν τὰ πρόχειρα τῶν ἀτόπων θαυμάσαντες, εἶτα κατὰ μικρὸν οὕτω προϊόντες καὶ περὶ τῶν μειζόνων διαπορήσαντες, οἷον περὶ τε τῶν τῆς σελήνης παθημάτων καὶ τῶν περὶ τὸν ἥλιον καὶ ἄστρα καὶ περὶ τῆς τοῦ παντός γενέσεως. ὁ δ' ἀπορῶν καὶ θαυμάζων οἶεται ἀγνοεῖν (διὸ καὶ ὁ φιλόμυθος φιλόσοφος πῶς ἐστίν: ὁ γὰρ μῦθος σύγκειται ἐκ θαυμασιῶν): ὥστ' εἶπερ **διὰ τὸ φεύγειν τὴν ἄγνοιαν ἐφιλοσόφησαν, φανερόν ὅτι διὰ τὸ εἰδέναι τὸ ἐπίστασθαι ἐδίωκον** καὶ οὐ χρήσεώς τινος ἔνεκεν. 「ところで、この知恵は制作的ではない。このことは、かつて最初に知恵を愛求した人々のことから見ても明らかである。ただし、**驚異することによって人間は、今日でもそうであるがああ最初の場合にもあのように、知恵を愛求し〔哲学し〕始めたのである。**ただしその初めには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念をいだき、それからしだいに少しずつ進んで遥かに大きな事象についても疑念をいだくようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸態だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。ところで、このように疑念をいだき驚異を感じる者は自分を無知な者だと考える。それゆえに、神話の愛好者もまた或る意味では知恵の愛求者〔哲学者〕である。というのは、神話が驚異されるべき不思議なことどもからなっているからである。したがって、**まさにただその無知から脱却せんがために知恵を愛求したのであるから、かれらがこうした認識を追求したのは、明らかに、ただひたすら知らんがためにであって、なんらの効用のためにでもなかった。**」『形而上学』出隆訳、1968、p.10。
- 37) Augustinus, *De vera religione*, c.39, n.73. CCSL 32, p.235, 38-40: Deinde regulam ipsam quam uides, concipe hoc modo: Omnis, **qui se dubitantem intellegit, uerum intellegit et de hac re, quam intellegit, certus est. de uero igitur certus est.** 「そこであなたの見るところの基準については次のように考えなさい。自分が疑っているということを知っているすべての人は真であるものを知解している。そして、彼は自分が知っているものについて確信している。」『真の宗教』茂泉昭男訳、『アウグスティヌス著作集2』教文館、1979、p.361。(ヘンリクス全集の注では、この引用箇所が同書c.39, n.72となっているが、正しくはn.73と思われる)。
- 38) cf. Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.5, 1010a1-32. Averroes, *Comm. in Metaph.*, IV, comm. 22 (Venetia, 1568, 90rE-vM)
- 39) Aristoteles, *Metaphysica*, IV, c.4, 1006a21-26: τοῦτο γὰρ ἀνάγκη, εἶπερ λέγοι τι. εἰ γὰρ μή, οὐκ ἂν εἴη τῶ τοιούτῳ λόγος, οὐτ' αὐτῶ πρὸς αὐτὸν οὔτε πρὸς ἄλλον. ἂν δέ τις τοῦτο διδῶ, ἔσται ἀπόδειξις: ἤδη γὰρ τι ἔσται ὠρισμένον. ἀλλ' αἴτιος οὐχ ὁ ἀποδεικνύς ἀλλ' ὁ ὑπομένων: **ἀναιρῶν γὰρ λόγον ὑπομένει λόγον.** ἔτι δὲ ὁ τοῦτο συγχωρήσας συγκεχώρηκέ τι ἀληθές εἶναι χωρὶς ἀποδείξεως ὥστε οὐκ ἂν πᾶν οὕτως καὶ οὐχ οὕτως ἔχοι. 「たしかにかねは、なにかを言うかぎり、なにか意味のあることを言うにちがいない。そ

うでないとすれば、このような者に対してはなんらの言論も、かれ自らに対しても他の人々に対しても、ありえないであろうから。ところで、もしかれがなにかを言ってくれば、すでに論証は可能である。なぜなら、すでになにか意味の定まったものが〔前提として〕与えられているわけであるから。ところで、この場合、責めは論証するわれわれにではなくて、これを黙認するかれにある。かれは言論を廃棄しながら言論を黙認している。のみならず、これを認める者は、論証なしに真実な或るなものかの存することを〈したがって必ずしもすべてが「そうであり且つそうでない」というのではないとのことを〉認めている。』『形而上学』出隆訳、1968、p.103。

- 40) Augustinus, *De Trinitate*, XV, c.12, n.21. CCSL 50, p.493, 75-83: **Absit etiam ut scire nos negemus quae testimonio didicimus aliorum; alioquin esse nescimus oceanum; nescimus esse terras atque urbes quas celeberrima fama commendat; nescimus fuisse homines et opera eorum quae historica lectione didicimus;** 〈nescimus quae quotidie undecumque nuntiantur et indicii consonis constantibusque firmantur;〉 **postremo nescimus in quibus locis vel ex quibus hominibus fuerimus exorti, quia haec omnia testimoniis credidimus aliorum.** 「私たちはまた、他人の証言によって知ったものを、私たちが知っていることを否定するのではない。私たちはその証言がなければ海があることを知らず、評判によって知られるようになった土地や都市があることも知らないであろう。また、私たちが歴史書から知る人々や、その人々の業績も知らないであろう。〈そして、日々あちこちから知らされ、それらを一貫した証拠をもって確証する報知をも知らないであろう。〉最後に、私たちはどこで、誰から生まれたかをも知らないであろう。なぜなら、これらのことはみな、他人の証言によって信じているからである。』『三位一体』泉治典訳、『アウグスティヌス著作集28』教文館、2004、p.469。(ヘンリクスの引用には〈 〉の部分はなく、credidimusはdidicimusとなっている。)
- 41) *Ibid.* CCSL 50, p.493, 72-75: Sed **absit a nobis ut ea quae per sensus corporis didicimus uera esse dubitemus. Per eos quippe didicimus caelum et terram et ea qui in eis nota sunt nobis** 〈quantum ille qui et nos et ipsa condidit innotescere nobis uoluit〉. 「しかし私たちは、身体感覚をとおして知ったものが真であることを疑ってはならない。実際、私たちは身体感覚をとおして天地を知り、また天地の中で私たちに知られていることを学び知ったのであるが、〈これは私たちと天地を創造された方が私たちに知らせようとした限りのものである〉。』『三位一体』泉治典訳、2004、p.469。(ヘンリクスの引用には〈 〉の部分はなく、quippeはenimとなっている。)
- 42) Cicero, *De Academicis*, 2.7.21
- 43) *Ibid.*, 2.7.21
- 44) Augustinus, *De Trinitate*, XV, c.12, n.21. CCSL 50, p.493, 66-72: Cum enim duo sint genera rerum quae sciuntur, unum earum quae per sensus corporis percipit animus, alterum earum quae per se ipsum, multa illi philosophi garrierunt contra corporis sensus; animi autem quasdam firmissimas per se ipsam perceptiones rerum uerarum, quale illud est 〈quod dixi:〉 ‘Scio me uiuere,’ nequaquam in dubium uocare potuerunt. 「さて、知られるものに二種がある。一つは身体感覚をとおして精神が知るものであり、一つは精神が自らによって知るものである。あの〔アカデメイア派の〕哲学者たちは身体感覚に反対してがやがや騒いでいるが、「私は自分が生きていることを知っている」と今言ったような、精神が自らによってこの上なく確実なものとして知っている真なる事柄を、決して懐疑の中に連れ込むことはできなかったのである。』『三位一体』泉治典訳、2004、pp.468-469。(ヘンリクスの引用では〈 〉の部分はなく、sintはsunt、earumはeorum、animi autemはcum tamen、garrieruntはgarriunt、ipsumはipsasとなっている。)

- 45) *Ibid.* CCSL 50, p.490, 8-12 : …his ergo exceptis quae a corporis sensibus in animum ueniunt, quantum rerum remanet quod ita sciamus sicut nos uiuere scimus? **In quo prorsus non metuimus ne aliqua uerisimilitudine forte fallamur quoniam certum est etiam eum qui fallitur uiuere**, nec in eis uisis habetur hoc quae obiciuntur extrinsecus ut in eo sic fallatur oculus quemadmodum fallitur cum in aqua remus uidetur infractus et nauigantibus turris moueri et alia sexcenta quae aliter sunt quam uidentur, quia nec per oculum carnis hoc cernitur. 「それゆえ、身体感覚から精神の中に入ってくるものは除外するとして、私たちの中にある知識のうち、自分が生きていることを知っているのと同じように確実なものは、どれほどあるだろうか。私たちは生きていることを知っているという点では、真実らしく見えるものによって欺かれはしないかと恐れることは決してない。なぜなら、欺かれる人も生きていることは確実だからである。」『三位一体』泉治典訳、2004、p.466。
- 46) *Ibid.* CCSL 50, p.491, 18-30: Intima scientia est qua nos uiuere scimus, **ubi ne illud quidem academicus dicere potest: ‘Fortasse dormis et nescis et in somnis uides.’** Visa quippe somniantium simillima esse uisis uigilantium quis ignorat? Sed qui certus est de suae uitae scientia, non in ea dicit: ‘Scio me uigilare,’ sed: ‘Scio me uiuere.’ Siue ergo dormiat siue uigilet, uiuit. **Nec in ea scientia per somnia falli potest quia et dormire et in somnis uidere uiuentis est. Nec illud potest academicus aduersus istam scientiam dicere: ‘Furis fortassis et nescis quia sanorum uisis simillima sunt etiam uisa furentium, sed qui furit uiuit.’ Nec contra academicos dicit: ‘Scio me non furere,’ sed: ‘Scio me uiuere.’ Numquam ergo falli nec mentiri potest qui se uiuere dixerit scire.** 「私たちが自分は生きていると知るの、内的な知識によってである。ここではアカデメイア派の人々も、『君はたぶん眠っていて知らないのだ。君は夢の中で見ているのだ』と言うことはできない。もちろん、夢を見ている人々が見たものと、目覚めている人々が見たものとが非常に似ていることを、誰が知らないだろうか。しかし、自分が生きていることの知識が確実であるならば、人はその知識によって「私が目覚めていることを知っている」と言うのではなく、むしろ「私は自分が生きていることを知っている」と言うであろう。それゆえ、眠っていても目覚めていても生きているのである。彼はその知識により、夢によって欺かれることはない。なぜなら、眠ることも、夢の中で生きていることも、生きている人のものだからである。あのアカデメイア派の人々もこの知識に逆らって、『君は気が変になっているに違いない。君は知らないのだ。気が変になっている人に見えることも正気の人に見えることも非常に似ていることが君にはわからないのだ』と言うことはできない。しかし、気が変になった人も生きているのである。彼はアカデメイア派の人々に対して、『私は気が変になっていないことを知っている』とは言わず、むしろ『私は自分が生きていることを知っている』と答える。それゆえ、自分が生きていることを知っていると言う人は、欺かれたり嘘を言ったりすることはありえない。」『三位一体』泉治典訳、2004、pp.466-467。(太字部分がヘンリクスの引用部分。ヘンリクスのテキストでは、一文目の“… et in somnis uides.”と“Nec in ea scientia …”が、quiaで接続されている。“sed qui furit uiuit.’ Nec contra academicos dicit, …”の部分は一文で続いている。simillimaはsimilia, falli… potestはfalliturになっている。contra Academicos dicitはcontradicit Academicusになっている。)